

お茶の間学 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

民家再生

「フォーラムin佐賀を前に」

日本の伝統的な民家は、再生可能な家屋であり、技術と暮らしの知恵が詰まった住文化の結晶であるといわれる。近代化の流れの中で、地域で眠っている民家の活用を考える「民家フォーラム2012 in 佐賀」(NPO法人「日本民家再生協会」主催)が11月23、24の両日、佐賀県鹿島市で開かれるのを前に、その意味を考えた。

(佐藤弘)

■半年かけて修復

まだ暑さが残る9月下旬。こづの垂れた稲穂の波が広がる佐賀県白石町で、ひときわ目立つヨシぶきの家に入ると、ひんやりとした心地よい空気が流れていた。

「実はこの家、見上げると空が見えるくらいにポロ小屋だったんですよ。かつての写真を、家の主である松枝正幸さん(62)に見せ

てもらったとき、思わず「えっ」という声が出た。築100年ほど経過した

物置小屋として利用されていた。それが再び、母屋として生まれ変わったのは2006年。親子よだいと生活を共にした思い出いっぱい

の古民家を再生したいとの思いが強くなり、日本民家再生協会が発行している実例集を読んだことがきっかけだった。

鹿島市内で建築全般の設計監理を行う「ie工房」の代表、鈴木弘祐さんが「ポロポロなんですけれど、再生できますか」と相談したところ「できますよ」と即答。鈴木さんは技術伝承の意味も込め、伝統建築を志す若者たちも交えて、

ポロ小屋が母屋に变身

約半年がかりで修復した。もう寿命が尽きたと思われた家を、見事生まれ変わらせたのだ。

■生き方そのもの

「使えなくなったとしても、土に還るだけ。昔の家屋のすきまのつがそこにあります」。同工房のスタッフとして松枝邸の再生にかかわった1級建築士の北島智美さん(32)は言

う。一般的に近代的な木造住宅の寿命は約30年といわれる。実際、松枝さんがそれまで住んでいた母屋の床は、合板のためフカフカ

壁に貼られたクロスは剥がれ、染みが浮かぶ。「土壁と違って中が空洞だから、壁の隙間から入ったネ



〈修復前〉30年間、物置小屋として使われていた家屋



〈修復後〉リフォーム後の家屋 (いずれも鈴木弘祐さん提供)



いろいろの部屋で語り合う松枝正幸さん(右)と北島智美さん

延べ床面積は、寝室として使っている屋根裏部屋(ロフト)も入れて、約100平方メートル。鈴木さんが保存していた旧家の柱や梁、屋根瓦、建具などを再利用したため、新築するより安く上がった。「風がすっと通るから、夏はクーラーなし。冬は薪ストーブで暖をとります。電気代もぐっと減りました」(松枝さん)

家を建てる時、人は建てる時代の住心地しかイメージしないのが普通だろう。だが、問題はその後。現代では木造住宅であろうと取り壊したら、それは即産業廃棄物となり、ごみとなる。

一方、地域にある木土、カヤなどの自然素材で造られた民家は違う。役目を終え、ふき替えられたカヤやヨシは肥料となり、土壁はまた練って再利用。木も削ったり、継いだりすれば使えるし、無理なら新になる。環境に負荷をかけることはほとんどない。

できたときがピークで、あとは劣化するだけの近代住宅と、世代を超えて生き続ける伝統的な民家。「なんか人の生き方そのものみたいで、面白いですね」。北島さんの言葉に大きくうなずいた。

次回17日

